あらすじ

大好きな幼馴染の隆に12月25日に告白しようと美羽は決意する。
しかし世界は終末論である12月21日までとなっている。
それを食い止めるために「世界のヒーローになろう！」と看板を掲げていたファンシーな着ぐるみを着た男に出会う。
それに釣られて美羽はある日ヒーローになった。

次の日に隆にそのことを告げる。
隆は笑い飛ばすが、その時バケモノと出会う。
そのバケモノを見事美羽が倒し、周りにいた人にヒーローと言われるようになる。

噂は瞬く間に広がり、美羽は一躍街の美少女ヒーローとなっていた。
隆はそんな美羽が心配で仕方ない。
学校では美羽を気遣い、下校りも一緒にすることにした。

そんな美羽には幸せな時間を邪魔する、バケモノたち。
そのバケモノに命がけで立ち向かう美羽。
その姿を見て隆は、なぜ美羽がヒーローにならなくてはならないのかと疑問を抱く。

隆は、美羽がヒーローになったいきさつを聞き、怒り心頭でその部屋を訪れる。
そこにいたファンシーな着ぐるみと喧嘩をする。
それなら君が守ればいいだろう？　と着ぐるみはあるアイテムを隆に渡す。
そのアイテムを使うことが出来るのは一回だけ。
そのアイテムを使えば、願いを一つ叶えることが出来る。
しかし代償を払う必要があり、その代償な等価交換である。
つまり、一人の命を救うことは一人を殺すことになる。
考えて使いたまえ。

そのアイテムを隆は悶々としながら、使用しないように、
しかし使用するタイミングを間違えないように、大切に持っていることにした。

隆は毎日、美羽と一緒行動して、沢山のバケモノを倒す美羽を見守っていた。

12月20日。世界は黒い雲に覆われて、その雲から巨大なバケモノが表れた。
そのバケモノこそが世界に終焉を導く者だと、教えられた美羽はそのバケモノに立ち向かう。

どんなバケモノにも押されることのない美羽だったが、今回ばかりは劣勢のようで、
そのうち力なく倒れてしまう。

隆は今がアイテムを使う時だと、そのアイテムを使用して倒れた美羽の傷を癒した。
全ての傷を請け負った隆は倒れ、そのことを知った美羽は怒りに燃え、
そのバケモノを倒すことに成功したが、隆は目を覚まさない。

美羽は絶望の中で願う。隆の目が覚めることを。

そこへ、ファンシーな着ぐるみを来た男がやってきて、その着ぐるみを脱ぐ。
なんとそこにいたのは隆だった。
どういうことなのか、説明を求める美羽に隆はこういった。
「そこにいる俺はこの世界の俺じゃない。
そいつのいた世界では、アイテムの使いどころを間違えてしまい美羽は死んでしまい、
世界は21日で終焉を迎えることになった。そうだ。
そこでこいつは考えた。アイテムを持っている時間まで巻き戻り、代償として命を取引に使うことを。
そして、着ぐるみを着て20日を待った。
呼び出された俺も驚愕したよ、目の前に自分がいたんだから、
そいつは俺はもう死ぬ。だから、変わりにこれを着て見守っていてくれ、
俺はもう使いた方を間違えない」

こうしてこの世界の隆と美羽は助かり、無事にクリスマスを迎えることが出来ました。

エピローグ
まどろみの中で隆は目を覚ました。
「たしか俺は死んだはずだ」
しかしどうだろう。非常に気持ちよく暖かい。
隆はふと柔らかいものが頭に敷かれていることに気づき、視線を上にやる。

美羽が優しい顔で「隆はヒーローになったんだね。羨ましいなー」そう言って笑った。
美羽に膝枕をされていることに気づいた隆は、顔を真っ赤にしていう。
「ヒーローをバカにしてごめんな」
「大丈夫だよ？　隆がそのヒーローになったんだから、私は嬉しいよ？」
そういって幸せに笑った。

※前隆が死んだ理由…
前隆が救いたかったのは、前美羽であり、前美羽は既に死んでしまっている。
だから絶望の淵で前隆はこう考えた。

「このまま死んでしまったら、俺には何もない。
俺も美羽のようにヒーローになって死にたい。
そしたら天国で美羽に会えるかも知れない」

そう思って今回の計画を練った。
人助けをしてから死ぬという壮絶な自殺を思いついた。

晴れて天国で美羽と会えた隆は幸せになりました。